

照葉樹林における種子散布者としての サル役割

高槻成紀 (東京大・総合研究博物館)

蒲谷 肇 (東京大・秩父演習林)

房総半島の高宕山において1996年1月から1997年12月までに採集されたサルの糞のうちT1群の68個を分析した。季節変化が明瞭で、春は常緑を含む葉 (41.5%)、夏は果実 (23.3%) とイネの初 (29.8%)、秋は果実 (58.9%)、冬は果実 (34.8%) と葉 (19.4%) が多かった。昆虫は少なく、最も多かった夏でも8.5%に過ぎなかった。

3年間の分析によると、多少の変化はあるものの、基本的によく似た季節変化を示した。すなわち、春の若葉、夏の多様な食物、秋の果実、冬の果実・種子と葉である。昆虫は年によって夏に多い年と秋に多い年があった。

糞は群れの識別をして採集されたが、分析したT1群は農作物への依存度は比較的小さいとされる。事実、森林性の樹木の種子が多く検出された。注目されたのはヤマグワ、クマヤナギ、イヌビワ、アケビ属、ムラサキシキブなど、林縁やギャップによく出現する低木やつる植物が多かったことで、これらがサルによって種子散布している可能性は十分に考えられた。しかし高木種は少なく、シイナラなどのドングリは破壊されるため散布される可能性はほとんどなかった。つまりサルは森林に依存的であるが、森林の優占種にとってサルはプラスではなく、森林の不安定な部分を構成する種にとって有利に機能している可能性が示唆された。

なお農作物にあまり依存的でないといわれる群れでも夏にはなかりのイネ初が検出されたことは、房総のサルの置かれた問題を象徴するかのようであった。

サル類に寄生するアメーバの病原性に関する研究

橋 裕司、程 訓佳 (東海大・医・感染症)、
小林正規 (慶応大・医・熱帯医寄生虫)、後藤
俊二、松林伸子、松林清明 (京大・霊長研)

サル類の腸管にはアメーバの寄生が高率に認められるが、多くは病原性のないアメーバであると考えられている。病原性があるのは赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica*) だけであるが、通常の検便では病原性のない *E. dispar* と区別することが出来ない。我々は以前に、京都大学霊長類研究所内で飼育されているサルから *E. histolytica*/*E. dispar* を単離し、鑑別を試みた。しかしこの時点では培養によって得られた栄養型虫体を解析に用いる必要があり、8検体についての結果しか得ることができなかった。今回は、再び霊長類研究所内で飼育されているサルを対象にホルマリン・エーテル法による検便を行うとともに、シストを出発材料としてPCR法による鑑別を試みた。

ホルマリン・エーテル法を用いた検便では、226頭のうち207頭から何らかのアメーバシストが検出された。最も多かったのは *E. histolytica*/*E. dispar* (陽性個体数141) で、以下、ハルトマンアメーバ (90)、大腸アメーバ (88)、ヨードアメーバ (66)、小形アメーバ (21)、ボレックアメーバ (9) であった。*E. histolytica*/*E. dispar* について、PCR法による解析を行ったところ、137例は *E. dispar* であることが判明した。4例はPCR陰性であり、*E. histolytica* は1例も検出されなかった。

以上の結果から、飼育マカクでは赤痢アメーバの感染は少ないことが明らかになった。